

重茂地区の環境保全と震災からの復興の取組み

—浜の女性（おんなたち）は これからも海と生きてゆく—

重茂漁業協同組合女性部

石 崎 弘 子

1. 地域の概要

私たちが住む重茂地区は、岩手県沿岸部のほぼ中央に位置する宮古市の南端にあり、北は宮古湾、南は山田町の山田湾を形成する形で外洋に突き出した半島で、本州最東端の地としても有名である（図1）。

平地は少なく、海岸線は荒磯と断崖の連続だが、ウニ、アワビをはじめとする磯資源が非常に豊富である。

地区の人口は平成27年3月31日現在1,494人（444世帯）で、人口が最も多かった1960年代の約半分にまで減少している。



図1 重茂漁協の位置

2. 漁業の概要

重茂漁協は組合員529人（正組合員483人、准組合員46人）、職員28人で構成されており、水揚げ高は約1万2,000トン、水揚げ金額は約25億円である（図2）。

主な漁業は、ワカメ・コンブ養殖漁業、秋サケが中心の定置網漁業、アワビ・ウニなどを対象とした採介藻漁業、ヒラメ・アイナメ・カレイ類・ソイ類を対象とした刺し網・カゴなどの漁船漁業である。

中でも外洋の荒海で育ったワカメ・コンブは品質が高く、特に本来の収穫期より早い1月から2月に成長段階のワカメを収穫したワカメ「春いちばん」は、シャキシャキとした歯ごたえが特徴であり、高い評価を得ている。

平成23年に発生した東日本大震災により、当地区は漁業全体に大きな被害を受けたが、すぐに地区内外から漁船を集め、震災から2カ月後には天然ワカメ漁業を共同で行うなど、いち早く漁業再開に取り組んだ。

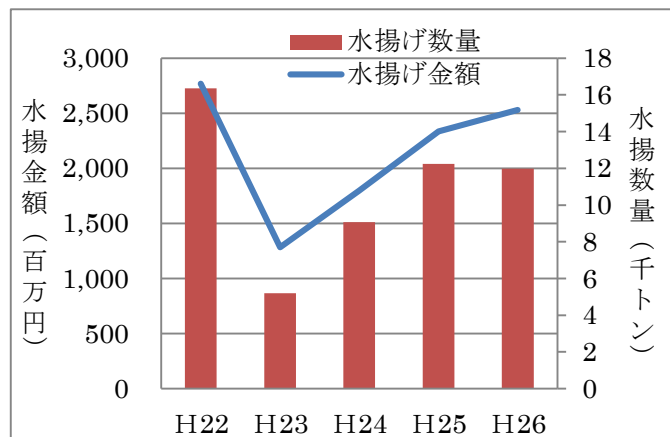


図2 重茂漁協の水揚げ数量、金額

現在は漁業施設の9割以上が復旧しており、本格的な復興に向けて歩みを進めている。

3. 研究グループの組織と運営

重茂漁協女性部は昭和30年10月1日発足の婦人部貯蓄組合から昭和32年10月1日に改組して設立され、現在は部員279人（組織率73%）で活動を行っている。津波により部員7人が犠牲になり、また、やむを得ず転居をした部員もいたため部員数は減少したが、各地区の役員を中心にした全世帯加入運動の結果、少しずつではあるが新規の部員を獲得している。

主な活動は、発足当初からの貯蓄・魚食普及の推進、婦人防火クラブ結成による防災運動、漁港・海浜清掃活動や広葉樹の植林による環境保全活動、漁協主催イベントでの食事の提供など地域に根ざしたものであり、昭和51年には女性部総会で「合成洗剤追放」を決議し、以来40年にわたってこの活動を続けている。

4. 研究・実践活動取組課題選定の動機

(1) 環境保全活動

当地区の沖合は、寒流と暖流が交錯する県内有数の好漁場である。

また、地区の深い原生林から流れ出すミネラル豊富な水が海藻や魚類を育み、ウニ、アワビなどの磯根資源や地魚など天然資源も豊富である。

しかし、昭和40年以降、当地区では海藻や魚類等の天然資源全体に陰りが見え始め、代表的な磯根資源であるアワビの漁獲量も減少傾向にあった（図3）。

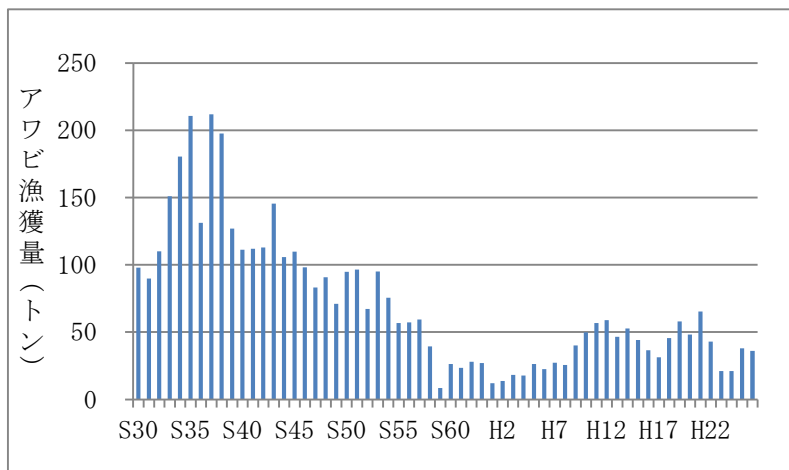


図3 重茂漁協におけるアワビ漁獲量の推移

私たちは安全・安心な食材にこだわる消費者団体と長年にわたり交流を続けてきたが、その交流の中で、普段使っている合成洗剤が豊かな海を汚し、環境や生物に悪影響を与えているのではないかと考えるようになった。

このように、天然資源の減少や消費者団体との交流がきっかけとなり、昭和48年に系統団体からわかしお石けんが発売されたこともあり、環境保全活動に取組む機運が高まった。

その後、昭和53年に漁協総代協議会、昭和55年に漁協通常総会で合成洗剤追放運動が決議され「売らない・買わない・使わない」の3ない運動をスタートした。

併せて、海浜、漁港施設や生活道路の定期的な清掃活動、里山の植樹活動の実施により、部員や地域住民に対して環境保全活動の意識付けを行うこととした。

(2) 地域を元気にする活動

震災により地域全体が被害を受け、女性部活動ができない状況となったため、避難所などで炊き出しを行ったほかは、1年間女性部活動を縮小し、各家庭の仕事に専念してもらった。

平成24年から活動を再開したが、女性部員をはじめ地域住民が一律に生活に不安を感じているうえ、復旧状況や将来に対する考え方がバラバラであったため、人が集まり、励まし合い、褒め合い、笑顔になることで部員や地域住民の心を一つにすることを目的としたイベントを開催することとした。

5. 研究・実践活動状況及び成果

(1) 環境保全活動

環境保全活動のうち最も力を入れた合成洗剤追放運動は、女性部だけではなく、地域全体で取り組む必要があると考え、昭和55年に合成洗剤不使用を呼びかける看板を地域内に設置し、地域住民に周知と協力を呼びかけた(図4、5)。



図4 洗剤不使用を呼びかける看板



図5 震災後のリニューアル看板

次に、私たちは重茂地区の商店を回り、店頭の商品を全て買い取ったうえで、代わりに石けんを販売するよう依頼したほか、各家庭を訪問して台所に入り、石けんの使用を確認するなど徹底した活動の結果、石けんの使用が地域で根付くようになった。

また、女性部の各地区の班長が中心となり、平成8年から石鹸の香典返し普及活動、平成16年から富山の薬売り方式の注文伺いを行い、人口が減少しているにもかかわらず、石けんの売上を維持している(図6)。

(2) 地域を元気にする活動

①平成24年の活動

7月に自宅が残った部員から生活必需品を集め「ふれ愛バザ

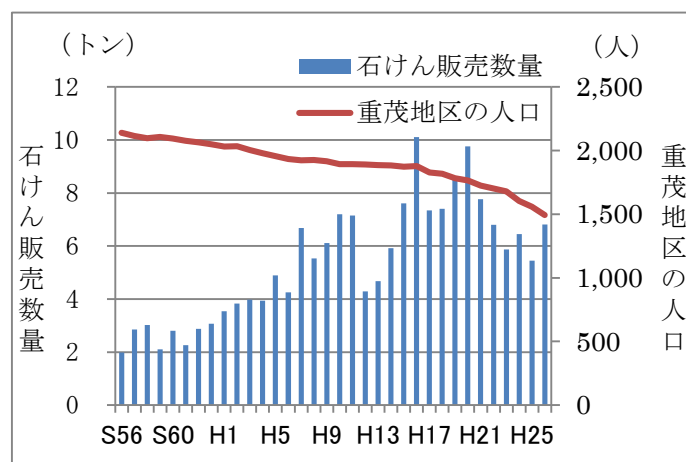


図6 重茂地区の人口と漁協購買における石けん売上数量の推移

一」を開催し、津波で家財を失った方などに格安で生活必需品を販売したところ、大変喜ばれた（図7）。

8月には地元水産物を格安で販売する「重茂味まつり」が再開し、女性部は食堂の運営や当漁協の代表的な水産加工品の1つである焼きウニづくり体験コーナーを任せ、イベントを盛り上げた（図8、9）。

9月には日頃の運動不足の解消と地域住民の交流を図る目的で開催した「浜の母ちゃんの運動会」には地域住民約500人が参加し、笑いあり涙ありで大いに盛り上がり、また開催して欲しいとの声が多数挙がった（図10）。

②平成25年の活動

10月に地域住民の交流を図る目的で「浜の母ちゃんの作品展」を実施し、約1,000点もの作品が集まった（図11）。

また、一般社団法人桜プロジェクトや三陸北部森林管理署の支援を受け、重茂小学校児童、教職員、地域住民、部員で、桜311本、もみじなど100本の植樹をし、いつまでも重茂の海や地域を守ってほしいとの願いを込め、子供たちに海の大切さや環境の大切さを伝えた（図12）。

③平成26年の活動

10月に県主催の浜料理選手権宮古地区大会が開催され、部員を集め何度も試作を重ねて挑み、優秀賞を獲得した（図13、14）。

このように、復旧・復興が進むにつれて、活動の内容は少しずつ変化してきている。



図7 ふれ愛バザー



図8 大盛況の重茂味まつり



図9 食堂の準備をする女性部員



図10 浜の母ちゃんの運動会



図 11 浜の母ちゃんの作品展



図 12 海と森林と未来を育む植樹体験



図 13 浜料理選手権宮古地区大会



図 14 浜料理選手権での作品

6. 波及効果

(1) 環境保全活動

長年にわたる環境保全活動により、現在も山・川・海の豊かな自然環境が守られており、活動を通じて地域住民が環境保全に関する高い意識を持ち、地域住民の心が1つになったことは大きな成果であり、その価値はお金には換えられないものと自負している。

なお、アワビの漁獲量は、種苗放流や餌が競合するウニの移植を継続的に実施した結果、平成元年から震災前の平成 22 年まで回復傾向を示していたため、このことが環境保全活動をさらに活性化させる動機となった。

平成 22 年には協同組合石けん運動連絡会が主催する「2010 シャボン玉フォーラム in 重茂」が開催され、全国から消費者団体の会員などが大勢参加した。

フォーラムでは、私たちが環境保全活動の講演や、海の大切さを表現した寸劇を披露したほか、コンブ収穫・加工体験、地域の森の環境整備や源流散策、環境問題を通じた意見交換などを行った結果、参加者の皆さんには、当地区の取組みを理解していただくことができた。(図 15)



図 15 シャボン玉フォーラム in 重茂

なお、このフォーラムが産地で開催されるのは初と聞き、私たちの活動が評価されたものと考えている。

また、重茂地区で水揚げされる水産物や漁協加工場の水産加工品は、消費者団体から安全・安心・高品質であると評価され、同団体との取引は当漁協加工場の売上の約4割を占め、重要な取引先となっている。

(2) 地域を元気にする活動

震災後に行ったさまざまなイベントは、地域住民たちが相互に支援し、褒めあい、励まし合う場となったことで、生活の不安が軽減し、元気を取り戻す一助になったと考えている。

これらの活動は目に見える成果としては現れにくいですが、こういった活動の積み重ねが、最終的には復旧・復興につながっていくものと信じている。

7. 今後の課題や計画と問題点

これからも環境保全運動に地道に取り組む、重茂地域の豊かな自然を未来に残していくため、私たちが中心となり、地域が一丸となって努力していく所存である。

また、復興途中であることから、今後も地域住民の心を1つにするイベントを企画・継続していく予定である。

一方、女性部の部員数は高齢を理由にした退部依頼による減少を懸念しており、若い世代の加入をさらに進めていく必要がある。

部員の平均年齢 57 歳はまだまだ若いと思っているが、幅広い世代の部員が交流することにより、新しい取り組みや地域に根差した活動ができるものと考えている。

若い部員には家庭の状況により無理のない活動の声掛けをしているが、さらに女性部活動に関心を持ってもらい、自ら率先して活動をし多くのリーダーが誕生するよう、今まで以上に魅力ある活動を行う必要がある。